

.....
 書 評

Leo Elders: Faith and Science.

An Introduction to St. Thomas' *Expositio in Boethii
 De Trinitate*, Herder-Roma, 1974, pp. 146

稲垣良典

本学会の会員であり、現在バチカン聖庁で勤務のかたわら、アンジェリコ大学、ウルバノ大学などで哲学の講義を行っているエルダース神父は、アンジェリコ大学の哲学研究双書の一冊として本書を公けにした。序文にあるように、本書はもと、京都聖トマス学院から刊行予定の *Expositio in Boethii De Trinitate* の精確な本文ならびに翻訳に、解説として付けられるはずであったが、都合で独立の研究書として出版されることになったものである。

本書の構成は、ポエチウスおよびかれの *De Trinitate*、トマス以前に書かれた注釈、トマスの『注解』(*Expositio* 以下 EBT と略記)、その著作目的および年代、構造、源泉などについての論述と、トマスの EBT (序文ならびにそれぞれ4つの項をふくむ6つの問題からなる)を順をおって注釈したものとの二つの部分となっている。EBT の著作年代については、それが初期のものであることについてはほぼ意見が一致しているが、『命題集注解』といずれが先・後であるかについては議論がわかれている。著者は EBT が著作された事情、年代に関する S. Neumann の研究に敬意を払いつつ、自らトマスの本文を注意深く比較・検討することを通じて、EBT を『命題集注解』の後におくべき理由のないことを詳細に論じている(19, 20, 57~8, 61, 80~81, 83ページ)。この問題、ならびに他のいくつかの問題を論ずるさいに、著者は「聖トマスの本文の注意深い研究によって………が判明する」「本文のより綿密な検討にてらして………は正しくないと思われる」などの表現を随所に用い、大胆に自説を主張している。これと関連して、著者は、解釈のために或る問題をとりあげるにさいしては、つねにその「歴史的背景」をできるだけ詳

細かつ忠実に再現しようと試みているのが注目される。その場合、いうまでもないが、著者はただ関連箇所あるいは問題テキストを引照、引用するだけにとどまるのではなく、しばしば写本の読み方、解釈史の問題にまで立入って議論を進めている。これらの議論は、本書が EBT のたんなる解説書ではなく、周到な考証にもとづく優れた研究書であることを立証するものといえよう。

つぎに、とくに興味深く思われた点について二、三記しておきたい。まず個別化の原理の問題（69ページ以下）に関して、トマス以前の中世哲学者たちにおいて、個別化をひきおこす原因は偶有ではありえないこと、またその原因は実体的形相の側においてではなく、むしろ質料の側に求めるべきであるとの見通しがしだいに強まったが、どのような因果作用（もしくは異なった因果作用の交錯）によって個別化が実現されるのかを明確にするまでにはいたらなかったこと、がのべられる。著者はこのようにトマスが直面した課題を明確に規定した上で、EBT におけるトマスの立場を、かれが他の著作において同じ問題を論じている箇所と比較しつつ、分析する。その結果、しばしば主張されているところに反して（たとえば M.-D. Roland-Gosselin, 最近では I. Klinger）、用語の使い方や意味に違いは見られるにしても、その違いを学説上の発展ないし変化に帰するのは非常に危険である、との結論が下されている。著者の立場は、表現の相違から性急に学説ないし立場の変化を結論すべきではなく、問題の箇所の学説上の内容を精確につきとめ、またそこでトマスが使用している源泉資料、執筆当時の論争点を考慮することによって、可能なかぎりトマスの立場の一貫性を損わない仕方でそれら表現上の相違を解釈するほうが方法論的により優れている、というものである（70ページ）。

つぎに EBT の主要問題の一つである学の区分に関して、トマスにおいては、かれの先行者たちにくらべた場合、重要な見方 (perspective) の変化が導入されることが強調される。すなわち、学の区別はその対象 (objectum) の区別にもとづいてなされるのであるが、対象の区別は事物のうちに見出される存在論的な完全性の段階と同一視することはできない。むしろトマスによると、「対象としての対象は人間の知的活動によって成立せしめられる」のである。これにたいして、或る学によって考察される事物ないし存在論的実在は質料の対象 (materia ないし subiectum) であり、この二つを明確に区別したことがトマスの功績であったとされる。

この二者の区別はきわめて微妙なものであり、A. Mansion ほどの明敏な哲学史家ですらそれを見落したという。著者によると、この区別は EBT の第一の草稿ではまだ見られず、第二の草稿ではじめて現れている。すなわち、第一の草稿では、トマスは精神の活動を实在の種々のレベルへと自らを同化せしめることとして記述しており、したがって实在の完全性の段階が理論学の区分にとっての直接の原因とつけとめられているといえる。しかるに最終稿ではこの立場は逆転せしめられて、理論学的区分にとっての直接の原因は人間精神自体の内部に求められている。なお、この点に関連して、著者は、第一稿においてトマスはまだ判断と形而上学的認識との結びつきを明確に意識していなかったという Geiger の解釈を斥けて、第一稿と最終稿との間の主要な相違点は前述のような立場の逆転にある、と主張している。このように学の区分の原理を实在の区分のうちではなく、精神が営む知的活動の異ったタイプのうち求めようとするトマスの立場は、さきにもふれたように、学の区分の歴史にてらして見るとき、まったく独創的なものであって、エルダース神父が本書でくりかえし強調している刷新者 (innovateur) としてのトマスを強く印象づける一例であるといえよう。

Geiger が指摘している点は、広義の *abstractio* にふくまれる厳密な *abstractio* と *separatio* との区別に関係している。周知のように、前者が知性の第一の作用（事物の本性的ないし何性を把握する作用）に属するのにたいして、後者は第二の作用（事物の存在 *esse* を捉える作用）に属する、とされている。EBT がトミストの間で大きな関心の対象となった理由の一つはこの区別であり、これがトマスの抽象理論（とくにカエタヌスの抽象理論との比較において）、および形而上学の概念、などの解釈に関してトミストたちに大きな影響を与えたことはあらためていうまでもない。EBT におけるトマスの抽象理論の画期的な意義に関して、エルダース神父はつぎのようにのべている。「この抽象説の偉大なる重要性は、千六百年の歴史のなかで、ひとりの哲学者がはじめて形而上学の身分を確立するのに成功した、という事実に存する。しかも聖トマスは、そのいつもながらの謙虚さで、自分の発見をあからさまに宣言するかわりに、それをたんに好奇心を働かせる人々の目にはふれないようにしたのである。」(109ページ)。

さらに、トマスの形而上学概念の独創性を示すものとして、自然神学と形而上学

との関係に関する見解がとりあげられている。自然神学と形而上学とは同一の学であるか、それとも異った学であるか、という問題は形而上学の対象たる有 *ens*, 有たるかぎりでの有 *ens qua ens*, あるいは共通的存在 *esse commune* をいかに解するかにかかっており、アリストテレスの注釈家（ギリシアからアラブをへて現代にいたるまで）の間で様々の解釈が示されているが、著者によると、トマスの立場はつぎのように理解される。すなわち共通存在の概念は、もっぱらわれわれが世界とわれわれ自身とにたいして有する接触にもとづいて形成されたものであり、（神が自らを人間にたいして啓示する場合を除けば）質料的な事物以外の実在との直接の接触なるものはない。したがって神は形而上学にとっての質料的対象 (*subjectum, materia*) ではありえない。しかしながら、われわれが直接に接触する事物の有についての形而上学的洞察からして、その偶存性および限定があきらかとなり、ここからして有の超越的な原因がなければならぬとの結論が生ずる。この意味で自然神学、すなわち有の第一・超越的な原因、ないし第一の存在の考察はたしかに形而上学に属する。しかし、神は形而上学が直接に関わるどころの事柄 (*subjectum*) ではなく、むしろそうした事柄にとっての原理 (*principium*) である。そしてこの場合の原理は形相的原理ではなく、むしろ作用原因 (*causa efficiens*) である。すなわち、この問題に関するトマスの立場の新しさは、形而上学の質料的対象たるすべての有は、第一の有たる神によって生ぜしめられたものであり、神に依存することをあきらかにしたところに認められる。

したがってトマスの立場を要約するとつぎのようになる。神は形而上学の質料的対象ではなく、また固有対象でもない。しかし、形而上学はその固有対象たる共通的存在の考察において、有の原因、その第一の作用原因を探究せざるをえないのであり、この探究において形而上学は神へ到りつく。その意味で自然神学は形而上学にふくまれるのである (108, 112, 115, 116ページ)。

さいごに著者はトマスの判断論に関して、用語上の浮動性を指摘し、そこになんらかの学説上の展開があったという可能性を認めている。とくに、トマスが判断（ないし結合し・分割する知性の作用）は存在に関わる、という場合の存在の意味が問題であり、これまでもトミスト達の間で論争が行われてきた。エルダース神父はそのことに触れていないが、最近 J. C. Doig (*Aquinas on Metaphysics. A His-*

torico-Doctrinal Study of the Commentary on the Metaphysics, 1972) がこの問題をかかなり尖鋭な形で提起し、あらたな論争の口火をきっている。エルダース神父は、この場合の存在 (esse) は事物の实在性 (reality), つまり事物の全体がそこにふくまれるが、存在の現実性をまっぴらで成立しているところの实在性の意味にとるべきことを主張する。そのことによって、判断が存在に関わることを主張する初期のテキストと、存在には触れず、判断において知性は実在にたいする自らの合致を認識することを強調する後期のテキストとを調和させることが可能になるというのである。ここでも前述した著者の方法論的立場があきらかに認められる。

結論的にいって、本書は EBT に関するこれまでの研究の批判的概観を提供してくれるにとどまらず、EBT をあらたに研究しようとする者が決して無視することのできない豊富な資料や有益な刺激を与えてくれる、すぐれた研究書であるといえよう。

ROBERT PRICE: William of Ockham and Suppositio Personalis.

Franciscan Studies (The Franciscan Institute, New York),
vol. 30, annual VIII, 1970, pp. 131-140.

JOHN SWINIARSKI: A New Presentation of Ockham's Theory of Supposition with an Evaluation of Some Contemporary Criticisms.

Idem, pp. 181-217.

水 田 英 実

最近 (1970年), 雑誌 *Franciscan Studies* はオッカムのスポジチオ論に関する研究論文を同時に二つ掲載した。前者はその標題の通りスポジチオ論のうち *suppositio personalis* に照準を合わせたものである。後者もこれを課題の一つにしている。